

北朝鮮における人権に関する国連調査委員会（COI）
最終報告書 詳細版（A/HRC/25/CRP.1）拉致問題関連部分仮訳

内閣官房拉致問題対策本部事務局
外務省

（c） 1955～1992年：戦後の韓国人拉致及び強制失踪

（※冒頭数字は段落番号、脚注は省略）

➤ 884

韓国人の拉致及び強制失踪は、朝鮮戦争の休戦協定署名後も長きにわたり続いている。韓国人約3,835人が、朝鮮戦争終了以降、北朝鮮により拘束もしくは拉致されている。そのうち3,319人は、1年半以内に韓国に戻され、9名は韓国に逃げ帰った。韓国人516人は、北朝鮮により失踪させられたままであると見られている。

（i）漁師の拉致及び強制失踪

➤ 885

これら拉致被害者の大半（89%）は、海上の漁船で捉えられ、強制的に失踪させられた。彼等の漁船は、北朝鮮領海内に乗り入れた事案もあれば、公海又は韓国領海内で捕まった事案もあるようである。合計で漁船124隻及び漁師1,147人が北朝鮮に拘束された。韓国人漁師457人は、北朝鮮により失踪させられたままである。

➤ 886

各漁船が捕獲された正確な位置は不明である。しかし、全ての漁船が類似した方法で捕獲されたことを示す信頼性のある証拠が、北朝鮮の元保衛部職員（単数）から寄せられている。北朝鮮の元保衛部職員達によると、漁船と漁師の捕獲は、朝鮮労働党の海軍により実行された。船が捕らえられると、船員は、数か月間調査される。大抵の場合、数名の船員は調査後解放され、他の船員は北朝鮮に残された。

➤ 887

韓国人漁師の漁船は、伝統的に2隻1組で航行し、片方の船がもう一方の船の状況を政府に通報したため、北朝鮮による船に対する妨害や捕獲は、即座に韓国で

知られることとなった。しかし、2隻とも捕獲された場合、船員の誰かが解放されるまで、漁船の状況は明らかにならなかった。例えば、プンブク号に乗船していたチェ・ウォンモ氏の場合、1967年6月5日に海上で捕獲され、1967年9月16日に船員8名のうち5名が、別の船で韓国に戻された。残された船員と戻された船員との違いから、若い船員を残すという北朝鮮当局の傾向がわかる。北朝鮮の元工作員の証言によると、最も若くて利発な者は、思想上の訓練を受けさせられ、スパイにさせられるとのことである。他の者は、別の産業へ従事させるべく送り込まれる前に思想教育を強いられたと見られている。

➤ 888

稀に、漁船と船員の拉致の確認が非常に遅れたことがあった。拉致された船員が北朝鮮から脱走し、韓国に戻って初めて情報がもたらされるという事案である。例えば、2013年8月に北朝鮮から逃れ韓国に戻ったある漁師により、41年前に海上で行方不明になったと思われていた2隻の漁船と船員25名の状況が初めて確認された。

- 1970年に捕獲された漁船に乗船していた漁師であるリ・ジェグン氏は、彼等の捕獲について、ソウルで本委員会に以下の通り述べた。

「1970年4月29日、北朝鮮の小型砲艦2隻が私達の船に近づいてきた。私たちの船は、領海線から約50マイル離れていた。しかし、この小型砲艦2隻は、私達に近づいてきた。…私は、韓国海軍の船が近づいてきたのだと思った。しかし、武装した10人は、北朝鮮人で、私達に発砲してきた。そして、彼等は、『降りろ、さもないと殺すぞ』と叫んでいた。船長も私達も皆、何が起きているのか分からなかったが、間もなく（状況を）把握した。船長が立ち上がろうとしたその時、彼らは船長を撃った。彼等は、従わなければすぐに私達を撃つと言った。非常に恐ろしくて、何故彼等がそんなことをしているのか聞けなかった。下に降りるように言われたので、降りた。そして、彼等は、指示通り行動しなかったら即座に私達を殺すと言った。それで、私達は、言われた通り、ダイニングルームに入り、彼等は扉を閉めた。北朝鮮のこの小型砲艦2隻が、私たちの船を約1時間曳航した。正に領海線を越えるとき、韓国海軍が私達を発見し、攻撃を始めたのだと思う。しかし、私たちの船は、既に38度線を越え、北朝鮮の領域内にいたため、韓国海軍に救助されることはなかった。」

➤ 889

元政府関係者職員によれば、捕らわれている船員で最も若く健康な者は韓国に返されなかった。彼等は、朝鮮労働党傘下の工作員養成施設に送られた。

- リ・ジェグン氏は、捕われて作業者となるべく訓練された韓国人漁師の一人であった。彼は、本委員会に以下の通り証言した。

「一般的に、韓国から拉致された全ての人は、比較的高度な教育を受けた人達であった。私達は、小学校、中学校を卒業し、そして、高校を中退した者も何名かいたが、比較的高度な教育を受けていた。そして、北朝鮮側は、私達を監視・観察し、私たちの身体的な健康面を見て、私達がその後使いものになるかどうか、金日成等幹部の保衛に奉仕できるかどうかを見ようとした。」

➤ 890

作業者養成所では、主体思想、金日成及び革命的行動について、学生達に講義が行われた。彼等は、テコンドー、運転、拉致、家屋への押入り、窃盗、家屋への侵入、そして殺人の方法について訓練を受けた。クラスの規模は小さく、通常、1クラスあたり4名に制限されている。訓練生達は、3名のクラスメートを除いて、常に、他のすべての研修員を見ることができないようにされている。彼等は、異なる時間に部屋へ出入りするよう指示され、極端な場合には、部屋と施設との間を歩く際に目隠しされた。

「私たちは、スパイ訓練所に送られた。この学校が何故必要であったかわからない。北朝鮮側は、この学校を卒業したら他の学校を卒業するよりはるかに多くの特権又は利益を得ることができると私達に言った。そして、彼等は、この作業者養成所に行く以外私たちには他の選択肢はないと私たちを脅かしさえした。そうして、私達は、3年8か月の間、その訓練所で教育を受けた。」

➤ 891

本委員会は、作業者養成所において捕われた者が忠実に学習過程に従事するようにさせる方法についても聴取した。恐怖と物理力の組み合わせが学生達を強制するために使用された。

- リ氏は、真剣に授業を受け学生たちの中でよりよく行動することを誓わない限り山腹まで連れて行かれ生命を脅かされることになる」と述べた。

「この学校にいたとき、私は、本当に勉強しなかった。私は、数日間、余り真面目に取り組んでいなかった。すると、ある日、彼等は私を連れて行き、ただ私を散歩に連れていっていただけと言った。彼等は、私を車に乗せ、約2時間走り、山奥に入った。そこには誰もいなかった。運転手は、手元に持っていた2丁の銃を私に見せ、『お前はずっと反抗的であるつもりか。諦めなければ銃弾を食らうことになるぞ。』と私に言った。私が『私を殺さなければならぬのか』と聞いたところ、

彼は『俺達の言うことを聞かないなら、なぜお前を生かしておかなければならないのか。』と言った。それで、私は、『分かった。言うとおりにする。』と答えた。こうして、私は生き残り、生活できたのである。」

➤ 892

期待される工作活動の実行に従順かつ忠実であった人々は、国家によりそれぞれ別個の住宅に囲われ、国家の意思に利用された。それとは対照的に、工作員養成所を卒業できなかった人々は、工場での労働に送られた。学生達は、学校から解放される前に、自らが拉致されたことを他者に漏らさないという誓いを学校でさせられた。

「私達は、拉致されて北朝鮮に連れてこられたということを話さないで指印で書類に署名しなければならなかった。…もし、社会に出て拉致されたことを誰かに話したら、政治犯収容所に連れていかれたであろう。私達は、卒業後、北朝鮮社会に出て、言われたことを何でもした。」

➤ 893

工作員としての養成に選抜されなかった他の拉致された漁師は、別の産業での労働に配置される前に思想教育の学校に送られてから、北朝鮮の社会に出される。ある証人は、本委員会に対し、北朝鮮がこれらの人々を「自発的に北朝鮮に来た勇敢な英雄」として表現したと述べた。

➤ 894

養成所から解放されると、拉致被害者は、国家安全保衛部による厳しい監視下に置かれた。ある証人は、監視レベル7に置かれていたと証言した。漁師や彼らの子孫は、韓国出身であるため、敵対成分に分類され、教育と就職の機会が制限された。

- 「韓国人の子供は、高等教育を受ける機会が制限されている。北朝鮮政府に仕える、政府に忠実な人々の子だけが、大学に通うことを許されている。…私は、彼（息子）に、彼が高等教育を受けるためなら自分の命さえも捧げると話した。私の息子は、韓国で高麗大学を卒業した。彼は、電気工学を研究し、よい生活を送っている。しかし、北朝鮮では、ただ私が韓国出身だからという理由で、私の子供達、私の息子は、高等教育、質のよい教育を受けることができなかった。北朝鮮での生活を経験した人は誰でもこのような事実を知っている。」

(i i) 北朝鮮工作員による拉致

➤ 895

北朝鮮に拘束されている韓国人516人のうち、70人は、韓国又は他の諸国内に派遣されている北朝鮮の秘密工作員により拉致された。これらの中には、ハイジャックされた民間機の旅客、韓国で拉致された休暇中の十代の若者や他の市民、海外で捕られえられた韓国市民及び軍人、沿岸警備隊員がいる。一つの事案を除き、これらすべての強制的に失踪させられた人々は、北朝鮮に伝えられた彼等の家族の度重なる嘆願や陳情にもかかわらず、その家族や韓国当局と接触することは許可されなかった。本委員会に証言した元北朝鮮情報士官は、金正日の実効的な指揮下にあった情報局である朝鮮労働党中央委員会35号室が韓国での拉致に関与したと陳述した。

➤ 896

他の元政府関係者は、朝鮮人民軍偵察局局长（三つ星の将軍）を通じて韓国人拉致の命令が伝えられたと証言した。対象の選別は明らかに「軍事584号室」として知られる調査センターからの提言に基づいて行われた。本委員会は、朝鮮人民軍の特別作戦ユニットの一つの任務が韓国及び日本の海岸沿いのスパイ活動を実行することであったとの証拠を受領した。秘密情報源は、一般的潜入、拉致及び沿岸調査の3種類の作戦を軍事584号室が実施したと証言した。拉致された漁民達は、思想教育とスパイ教育を受け、これらの活動に関わるデータを分析し、また、作戦を実施するために工作員を海に案内した。

➤ 897

1969年12月11日、大韓航空の国内線の航空機が、北朝鮮工作員にハイジャックされ、北朝鮮に飛行した。同年12月13日、北朝鮮放送局は、当該航空機が2名のパイロットにより自発的に北朝鮮に飛来したと報じた。しかし、後日、パイロットは機内で北朝鮮工作員に脅迫されていたことが明らかとなった。乗組員4名及び旅客46名が航空機に搭乗していた。旅客の39名はハイジャックの66日後に開放され、韓国に帰国した。乗組員4名と残りの7名の旅客は韓国に帰されなかった。北朝鮮は、これら11名は自分の意思で北朝鮮に残ったと主張した。客室乗務員2名は韓国への放送の中で使われた。1992年8月、ソン・キョンヒさんは、平壤放送局で「北朝鮮は私の心身すべてが根ざしている」と話した。39名が韓国帰国時に行った記者会見で、北朝鮮に残った人々は自発的にそうしたわけではないことが明らかになった。北朝鮮は、赤十字を通じて伝えられた彼等の解放を求める陳情も拒否した。意思に反して留め置かれた11名は、比較的若く高度の技術を有していた。彼等の職業は、パイロット、映画製作、カメラ操作、出版及び薬学であった。

- ソウルでの公聴会で、拉致された映画作者のホァン・ウォン氏の子息と拉致された客室乗務員のチョン・キョンスクさんの兄弟は、本委員会に証言した。両名は、家族が拉致された時の深い喪失感と絶望感を伝えた。チョン氏は、本委員会に対し、「我々家族にとってあれはただただ本当に悲しい事件だった。私たちは彼女がよい学校を卒業して素晴らしい仕事についてとても幸せだったが、彼女は拉致された」と述べた。
- ホァン氏は、本委員会に対し、彼の父の北朝鮮での所在を見つけるために韓国政府に対して何年も支援を求め続け断られ続けた後、韓国政府を信じることをやめたと述べた。

➤ 898

ハイジャックされた航空機の拉致被害者の家族達は、拉致被害者に関する情報を得るのに非常に苦労した。拉致被害者の家族によれば、韓国政府は北朝鮮に対してこの件を取り上げることが決まっていた。拉致被害者は離散家族と認識され多数の離散家族の一連として対処されると聞かされた。ホァン氏は、韓国の誰もが離散家族の再会に注目しているので拉致を政治的でなく人道的な文脈で考えるのではないかと述べた。

➤ 899

民間航空機及びその搭乗者の拉致は、重大な国際法違反である。1970年9月9日、国連安全保障理事会は、決議286号を採択し、航空機のハイジャックに関して加盟国に対し旅客及び乗組員の即時解放を訴えた。1970年11月25日、第25回国連総会で決議第2645号が採択され、航空機のハイジャックによる旅客及び乗組員の拘束を非難し、航空機が駐機する加盟国に対して、旅客及び乗組員へ配慮と安全を提供し旅客・乗組員が旅程を再開できるようにすることを要請した。1983年以降、北朝鮮は、航空機不法奪取防止条約の締約国となっている。北朝鮮は、北朝鮮に着陸した不法に奪取された航空機に搭乗しているすべての旅客と乗組員が旅行を継続することができるように便宜を与える義務を負っている。国際社会の要請にもかかわらず、かかる国際法上の犯罪に対する十分な対応は得られなかった。

➤ 900

1977年及び1978年夏に韓国の高校生5名が韓国の海岸周辺で拉致された。1977年、2名の高校生リ・ミンギョ氏とチェ・スンミン氏は、同じ浜辺で拉致された。1978年夏、キム・ヨンナム氏は、韓国のグンサンの浜辺で連れ去られ、リ・ミョンウ氏とホン・グンピョ氏は、ホンドの浜辺で拉致された。キム・ヨンナム氏は、2006年の離散家族再会で短期間家族と再会することができた。

➤ 901

一人の元北朝鮮情報士官は本委員会に対して、高校生の拉致は35号室により金正日の指揮の下で実行されたと証言した。同士官によれば、生徒達は北朝鮮に連れて行かれ、米国、韓国へ外国人学生として送り込まれることを目的として訓練を受けた。

➤ 902

韓国当局は、拉致被害者として、30名の韓国軍兵士及び沿岸警備隊員をリストアップした。これら兵士は、軍事境界線で、又は、ベトナム戦争従軍中に、拉致された。これら沿岸警備隊員は、北朝鮮による韓国海上警備隊に対する攻撃の際に連れ去られた。

➤ 903

本委員会は、ベトナム戦争に従軍し戦争捕虜となった韓国兵士が帰還を拒否され北朝鮮に引き渡されたとの申し立てを聞いた。アン・ヨンソ氏は、ベトナム戦争従軍中に消息を絶ち1967年にニュースキャスターとして平壤に現れた兄のアン・ハクソ氏は北朝鮮に引き渡され1975年に処刑された、と主張した。2009年、韓国政府により調査委員会が設置され、アン・ハクソ氏は、自発的に北朝鮮に逃亡したとの当初の想定とは異なり、ベトナムで捕らえられ意志に反して北朝鮮に送られたと結論付けた。

- アン・ヨンソ氏は、本委員会に対し、ラジオで聞いた兄（の声）について話した。

「兄の声は聞こえた。それは、とげとげしいもので、まるで原稿を読んでいるようだった。彼は、何故、如何にして北朝鮮にいることになったのかを話した。そして、それは私の兄に限ったことではなかった。当時、北朝鮮に強制的に連れていかれた者が私の兄が読んだような原稿を読まなければならなかったことは、誰もが知っている。」

➤ 904

12名の韓国人が海外旅行中に拉致されたと信じられている。このカテゴリーに含まれる被害者として、拉致後に逃げ出すことができた有名な韓国人女優の崔銀姫さんと韓国人監督の申相玉氏の2名がいる。その他にも、西独で2家族8名、オーストリアで学生1名、ノルウェーで教師1名が拉致されている。

➤ 905

1978年、韓国人女優の崔銀姫さんは、香港に映画産業の関係者と会うために旅行した時、拉致された。北朝鮮工作員に船上に強制的に乗せられた後、崔さんは、加害者に対して説明を求めた。これに対し、彼等は、「崔夫人、我々は金日成将軍の懐に向かう」と返答した。1月22日、北朝鮮到着に際して、崔さんは金正日の迎えを受け、平壤へ同行した。崔さんの失踪を知った著名な映画製作者である前の夫の申相玉氏は、彼女を捜しに香港に行った。彼も、香港で、同じ北朝鮮工作員に1978年7月に拉致された。金正日は、彼が北朝鮮に到着した際、「私はあなたのような才能ある監督が北朝鮮に欲しくて作戦チームにあなたを連行するプロジェクトを実行させた」と彼に話した。この情報は、金正日が自分自身で拉致命令に署名したと示唆する、拉致に直接関与した元北朝鮮政府関係者による説明と符合している。北朝鮮にいる間、申相玉氏と崔銀姫さんは、金正日が製作責任者となった多数の北朝鮮製映画に関与した。1986年、ベネチア映画祭訪問中に、両名は、米国大使館に逃げ込んだ。その後米国に定住した。申氏は既に死亡している。

➤ 906

欧州で多くの韓国市民が消息を絶っており、そこで活動している北朝鮮工作員に拉致されたと信じられている。1971年4月、ドイツ連邦共和国（西独）の韓国大使館職員のユ・ソングン氏、妻のチョン・スンソブさんと子供のユ・キョンヒさんとユ・ジニさんが拉致された。1979年6月、コ・サンムン氏が欧州で消息を絶ったが、後に、北朝鮮は、彼はオスロの北朝鮮大使館に入った後自分の意思で北朝鮮に亡命したと主張した。1985年12月、オ・ギルナム氏、その妻のシン・スクジャさんと子供のオ・ヘウオンさんとオ・ギュウオンさんが、ドイツにいた北朝鮮工作員に北朝鮮行きをそそのかされた。オ氏は、(その工作員が)他の韓国国民を北朝鮮に誘い込む任務にある最中に、コペンハーゲンで逃げ出すことに成功した。彼の家族は、北朝鮮で拘束されている。1987年8月、マサチューセッツ工科大学の学生のリ・チェファン氏は、オーストリアで夏期休暇中に消息を絶った。

(f) 1970～1980年代の日本人拉致事案

➤ 924

2002年9月、日本の小泉純一郎総理大臣は、北朝鮮による拉致が疑われた日本人の帰国について北朝鮮当局と交渉すべく、平壤を訪れた。北朝鮮の最高指導者である金正日は、小泉総理大臣に対し、北朝鮮の工作員が13名の日本人（女性7名、男性6名）を拉致したことを認めた。これは、多くの日本人が北朝鮮により強制的に誘拐されたのではないかと日本において何年も疑われてきた末のことである。小泉総理大臣が述べたところでは、金正日は、拉致を認める中で、「これらは北朝鮮に所属していた者による過去の仕業であったとし、謝罪をして、遺憾の意を表した。」。金正日と小泉総理大臣がそれぞれの国を代表して発出した平壤宣言では、「日本国民の生命と安全にかかわる懸案問題については、朝鮮民主主義人民共和国側は、日朝が不正常な関係にある中で生じたこのような遺憾な問題が今後再び生じることがないように適切な措置をとることを確認した。」と記された。小泉総理大臣に対して（拉致を）認める以前、北朝鮮は、同国に拉致された又は強制的に失踪させられたと考えられる失踪者に関するすべての主張を否定していた。

➤ 925

本委員会は、拉致を実行する部門で働いていた元北朝鮮職員からの証言を得た。朝鮮労働党の35号室で働いていた元職員は、当該室は「誘拐や拉致といった通常の諜報活動」を担当していたと述べた。当該室のある部局は、日本人の拉致を専門に扱っていた。この元職員は、1990年に35号室に入ったが、当時、北朝鮮に人を「連れてくるように」との命令が金正日から下された。これを受け、幹部がこの命令を実行するための計画書を作成すると、金正日がこれに署名した。一般的な指示は、外国人を北朝鮮に来るよう説得するようというものであった。しかし、それが不可能なときには、誘拐しなければならなかった。

➤ 926

日本における陸地での誘拐の多くは、海岸に近い地方で発生した。工作員は、海から日本に近づき上陸した。一人で歩いている女性は、実行が容易なため、しばしば標的にされた。元職員は、被害者を獲得するために用いられた様々な手段について述べた。例えば、ボートに運ぶための袋に入れる前に、被害者を取り囲み、呼吸を塞ぎ、かつ／又は麻酔剤に浸した包帯を口に縛るといったことである。本委員会が得た他の証言によれば、スパイ訓練の正規の科目に拉致の実践が含まれており、また、50%のスパイが日本語を、50%は韓国語を教えられたとのことである。35号室で働いていた上述の元職員は、拉致された10名の日本人女

性を個人的に知っていた。

➤ 927

朝鮮人民軍の偵察局で働いていた別の元職員は、海上における日本人拉致に関わったと証言している。この元職員によると、拉致のオペレーションを行うには金日成か金正日の署名が必要であった。金正日はまた、拉致に関与する主要部署の1つである偵察部門を頻繁に訪れていた。海上における拉致は、一般的に、深夜0時から午前3時までの間に行われた。北朝鮮の船は日本船舶（日本語が記載されていた）に偽装し、日本の海岸近くにおいて一隻だけいる日本の小船に近づいた。この小船が襲撃されると、最も若くて優秀な船員だけを捕らえた後に小船は沈められ、他の必要とされない乗組員は溺死した。北朝鮮工作員は、エンジンルームのポンプを切断し、小船を浸水させ、1～2時間以内に沈没させた。

➤ 928

日本人は、通常、スパイ活動やテロ行為に利用するために誘拐された。彼らは、日本語や日本の文化を北朝鮮工作員への訓練の中で教えたり、日本の身分証明書をより精巧に偽造するための研究を行ったり、また、北朝鮮工作員が拉致された者の身分を使用して日本人になりすましたりすることに利用された。例えば、1987年、2名の北朝鮮工作員が日本人の旅券を使って日本人になりすまし、バグダッド発アブダビ、バンコク経由ソウル行きの大韓航空機858便の頭上手荷物入れに爆弾を仕掛け、アンダマン海上空で爆破させ、搭乗していた115名全員を死亡させた。2名の北朝鮮工作員は、バーレーン空港で逮捕された後に自殺を図った。男性工作員は死亡したが、金賢姫という女性工作員は生き残り、後に、自分と相手の男性が北朝鮮国籍であり、韓国大統領選挙と1988年のソウル・オリンピックを妨害するために金正日から航空機を爆破せよという命令を受けていたことを自白した。他の国民の拉致に関する証言でも、日本人になりすましていた拉致実行犯がいたとのことである。

➤ 929

朝鮮労働党中央委員会傘下の35号室及び作戦部並びに朝鮮人民軍傘下の偵察局は、2009年、統合されて「偵察総局」となり、公式には朝鮮人民軍に所属している。

➤ 930

2002年の（訪朝時の）記者会見において、日本の小泉総理大臣は「自分から不審船事案が繰り返されてはならないと発言したのに対し、金正日総書記からは、これは軍部の一部が行ったと思われ、今後、更に調査をしたい、このような問題

が一切生じないよう適切な措置を取るとの反応があった」旨述べた。本委員会は、これら拉致事案が、軍隊の不屈きな分子により行われたものではないとの認識である。むしろ、金日成そして引き続いて金正日による明確な命令の下で実行された、対象を絞った攻撃であった。

➤ 931

金正日が日本人13名の拉致を認めたことは、明らかに、すべての真実ではない。日本政府は、帰国者5名を含む17名の日本人（女性9名、男性8名）が拉致されたことに疑いはないとしている。日本の警察は、北朝鮮による拉致の可能性を排除できない日本人行方不明者として、約860名につき引き続き捜査・調査している。日本人の行方不明（及び北朝鮮における人権）に関連した問題に取り組んでいるグループの集合体である「北朝鮮における『人道に対する罪』を止める国際的な連合（ICNK）」の日本チームは、本委員会に対し、北朝鮮による日本人拉致被害者数は少なくとも40名、おそらく100名以上にのぼると証言した。

➤ 932

北朝鮮による十分な協力を得られない状況において、本委員会は、日本から北朝鮮に拉致された日本人の数を正確に把握することはできない。しかし、本委員会は、少なくとも100名の日本人が北朝鮮に拉致された可能性がある(probable)と考えている。拉致の理由としては、工作・軍関係の訓練学校において外国語を教えること、拉致被害者の専門的な技術の必要性、そして、多くの拉致被害者の事案に見られたように、北朝鮮に住む外国人の結婚相手として「与える」こと、などがあると考えられている。IV. Cで記述したとおり、「純粋な朝鮮民族」の保護と維持が北朝鮮社会の重要な特色であり、混血の朝鮮民族の出生を防ぐための多大な努力がなされている。特に、日本人は、将来日本においてなされる革命を引き起こすために北朝鮮における日本人の数を増加させるため、他の集団から隔離されているように思われる。

(i) 日本における拉致事案

➤ 933

2002年、日本の小泉総理大臣との会談の際、金正日は、日本人13名の拉致を認めた。その後、日本人5名が日本への訪問を北朝鮮に認められ、全員がそのまま日本に残った。北朝鮮は、その他8名の日本人拉致被害者については、死亡したと述べた。しかし、その主張を裏付ける明確な証拠は示されていない。

- 934：横田めぐみさん～1977年11月15日
横田めぐみさんは、13歳の時、日本の新潟県の沿岸地方において、下校中に強制的に連れ去られた。2002年、金正日は彼女の拉致を認めたが、めぐみさんは29歳の時に死亡したとされた。しかし、この主張を裏付けるために提供された死亡確認書は偽造されたものと見られ、また、彼女のものとしてされた遺骨のDNA検査では一致が見られなかった。めぐみさんは、本人もまた10代に北朝鮮により拉致された韓国のキム・ヨンナム氏と結婚したと見られる。その間には、一人の娘がいる。

- 935
横田さんの両親、横田早紀江さんと横田滋さんは、全ての拉致被害者のために、疲労をものともせず活動してきた。両親は、2013年8月に東京で開催された公聴会に出席し、本委員会に対し以下のとおり証言した。

「初めて成長した（めぐみの）写真を見た（とき）…涙が出ました。（拉致以来）初めて、写真で娘を見たのです。本当に悲しかった。それまでの20年間、あらゆる所を探しました。そして今、平壤にいます。とても胸が苦しかったです。やっと娘を見つけたのに、まだ助けることができずにいます。娘にごめんなさいと言いました。そして、まだ彼女を助けてあげられずにいることに対し、涙を流しました。」

- 936：田口八重子さん～1978年6月
田口八重子さんは、1978年6月、2人の幼い子どもを残したまま、東京から行方不明となった。1987年11月に発生した大韓航空機爆破事件で有罪となった元北朝鮮工作員の金賢姫は、田口さんに日本人になりすます方法を教わったとされている。北朝鮮は、田口さんは30歳の時に死亡したと主張した。しかし、北朝鮮当局は、彼らの主張を裏付ける信頼性のある証拠を提示していない。

- 937：地村富貴恵さん（旧姓濱本）、地村保志さん夫妻～1978年7月7日
地村夫妻は、日本の福井県小浜海岸付近で、夕刻、デートをしている時に、拉致された。地村夫妻は、2002年、（北朝鮮が）拉致を認めた後に日本への帰国が許された5名の拉致被害者のうちの2名である。彼等は北朝鮮に戻らなかった。その後、彼等の子供達は、2004年、日本にいる両親の元に戻ることができた。2006年、日本政府は、彼等の拉致に責を負うとされる北朝鮮工作員・辛光洙の逮捕状を発付した。

- 938：蓮池祐木子さん（旧姓奥土）、蓮池薫さん夫妻～1978年7月31日

蓮池夫妻は、日本の新潟県柏崎市の海岸で拉致された。蓮池夫妻は、2002年、（北朝鮮が）拉致を認めた後に日本への帰国が許された拉致被害者5名のうちの2名である。彼らの子供達は、2004年に日本に帰国した。2006年及び2007年、日本の当局は、同夫妻の拉致に関わったとされる3名の北朝鮮工作員、チェ・スンチョル、ハン・クムニョン（自称：ハン・ミョンイル）、キム・ナムジンの逮捕状を発付した。

- 939：増元るみ子さん、市川修一さん～1978年8月12日
北朝鮮が拉致を認めた3組目のアベックである増元さんと市川さんは、1978年夏、日本の鹿児島県吹上浜に夕日を見に出かけた後、行方不明となった。北朝鮮は、2人は1979年7月に結婚し、それぞれ27歳と24歳で死亡したと主張した。死亡したとされている他の拉致被害者と同様、彼らの死亡を立証する信頼性のある証拠は提示されていない。増元さんの弟である増元照明さんは、本委員会に対して以下のとおり述べた。

「私の家族は、るみ子さんが心配で病気になりそうでした。彼女がどこかで生きているようにと祈らなかった日はありません。私たちは、長い間深く悲しみましたが、ある時点から、このことについて話すのを止めました。話すたびに傷口が開き、母が、昨日起こったことのように泣き始めるからです。

私たちは、挫けずに毎日を生きていこうとしましたが、私たちの笑顔は作り笑いです。私たちは、いつもるみ子のことを考えています。私たちは、人生を楽しむ力を完全に失ってしまいました。愛する姉を失った苦痛は決して消えません。私は、両親が経験してきた痛みを想像することしかできません。」

- 940：曾我ひとみさん、曾我ミヨシさん～1978年8月12日
曾我さんと彼女の母親は、新潟県の佐渡島で、買い物からの帰宅途中に拉致された。北朝鮮は、曾我ひとみさんの拉致は認めているが、彼女の母親である曾我ミヨシさんを拉致したことは否認している。2002年、（北朝鮮が）拉致を認めた後、曾我ひとみさんは、日本への帰国を許された。

- 941
曾我ひとみさんは、北朝鮮において、チャールズ・ジェンキンス氏と結婚した。彼は、朝鮮戦争後、韓国にある基地から北朝鮮に自発的に渡ったアメリカ人脱走兵5名のうちの1人である。1965年に韓国にある基地から脱走したジェンキンス氏は、彼より先に北朝鮮に渡っていた3人のアメリカ人、ラリー・アレン・アブシャー（1962年）、ジェイムズ・ジョセフ・ドレスノク（1962年）、ジェリー・ウェイン・パリッシュ（1963年）の近所に住んでいたと述べてい

る。ジェンキンス氏によると、4人は嚴重に監視され、行動の自由が著しく制限されていた。4人は、1966年にソ連大使館に亡命を求め脱出を試みたが成功せず、北朝鮮から離れられる機会は全くないことを確信した。彼らは、自発的に北朝鮮に渡ったが、捕らわれの身となった。2004年、ジェンキンス氏と2人の娘は、曾我さんと日本で再び共に暮らすことになった。

➤ 942

わずか19歳で拉致された曾我さんは、北朝鮮に着いた後の最初の1年間、横田めぐみさんと同じ場所で監禁された。2人は嚴重に監視され、相互の日本語での会話は禁じられていたが、互いに親しくなった。

➤ 943：原勅晁さん～1980年6月

1980年6月、原勅晁さんは、日本の宮崎県で行方不明となった。北朝鮮工作員である辛光洙は、後に日本において原さんになりすました。また、辛光洙は、原さんの旅券を使って、韓国を含む様々な国に渡航した。彼は、韓国において逮捕され、裁判にかけられ、投獄された。逮捕後、彼は韓国当局に対して、原さんを拉致し北朝鮮に連れて行ったことへの関与を認めた。北朝鮮は、原さんは1986年に肝硬変で死亡したと主張した。日本人拉致について自身の著作の中で多くの情報を明らかにしたジャーナリストの石高健次氏は、本委員会に対し、原さん拉致事件の経緯について以下のとおり述べた。

「3名の人物が辛光洙に協力し、彼の命令に従って、原勅晁という名の大阪で働く調理師を誘拐した。辛光洙は、原さんを九州に連れて行き、そこで北朝鮮からやってきた他の工作員たちと合流して、原さんを袋の中に入れて無理矢理船に乗せ、北朝鮮まで連れ帰った。」

➤ 944

日本政府は、他に4名の日本人が北朝鮮に拉致されておりその解放と日本への帰国を求めていると主張している。北朝鮮当局は、これら4名の日本人が北朝鮮に入境したことはないと主張している。

➤ 945：久米裕さん－1977年9月19日

久米裕さんは、日本の石川県にある宇出津海岸で姿を消した。元警備員であった久米さんは、北朝鮮の工作員である在日朝鮮人により、金儲けに誘われ騙された。工作員は、岸から離れた場所に係留している船に乗っている人々のところにゴムボートでお金を持っていくよう、久米さんに依頼した。久米さんは帰ってこなかった。警察は、その工作員の疑わしい行動に気付き、23日間拘束したが、出国

前の久米さんの意思が不明であったことから、最終的に久米さんの失踪への帰責を証明するに足る証拠の収集には至らなかった。北朝鮮は、久米さんは入境していないと主張している。

- 946：松本京子さん－1977年10月21日
松本京子さんは、日本の鳥取県で編み物教室へ行く途中に姿を消した。松本さんが2人の見知らぬ男と話していたところを近所の住民が目撃している。松本さんのサンダルは海岸の近くで発見されており、その見知らぬ男たちにより船で連れ去られた疑いがもたれている。日朝協議の中で、北朝鮮は、松本京子さんの入境は確認できないと述べている。
- 947：曾我ミヨシさん－1978年8月12日
曾我ミヨシさんは、曾我ひとみさん（上記参照）と共に拉致された。北朝鮮は、曾我さんは入境していないと主張している。

(ii) 海外からの拉致

- 948
1970年代初め、共産主義及び／又は主体思想に魅了され、自らの意志で北朝鮮に渡ったある日本人グループが、その後、海外における日本人の拉致に加担した。
- 949
よど号グループは、1970年に航空機をハイジャックして北朝鮮へ向かわせた9名の日本人からなる。このグループは、日本の共産主義同盟から1969年に分離した過激派左翼活動家の小さなグループである日本赤軍に属していた。警察は、当時の首相であった佐藤栄作を誘拐する計画を暴き、50名以上を逮捕し9名を国外逃亡させる決断に至った。1970年3月31日、思想上のリーダーである塩見孝也と活動上のリーダーである田宮高麿の指示の下、このグループは、乗客129名を乗せた東京発福岡行き日本航空351便をハイジャックし、(福岡とソウルで乗客を降ろした後)北朝鮮に向かわせた。彼等がハイジャックした飛行機が「よど号」であったことから、この9名は「よど号グループ」として知られることとなった。このグループは、キューバ行きを計画し、北朝鮮がキューバへ彼等を送ってくれることを期待したが、北朝鮮に留まることとなった。
- 950
よど号グループの妻や恋人は、後に、北朝鮮への入国を認められた。未婚のメン

バーは、北朝鮮において日本人と結婚した。よど号グループ及びその配偶者は、平壤郊外の「日本革命村」と名付けられた地域に居住した。彼等の重要な任務の一つは、子供を産んで、金日成が終局的な共産主義の樂園を創造するには代を継いで革命をすることが必要であると信じたところに従い、日本での革命を共に実現する革命を担う将来の世代を築くことであった。よど号のメンバー及びその配偶者は、主体思想と金日成主義に基づく集中的な教育を受けた後、金日成の要請に従って活動を行うよう命ぜられた。

- 八尾恵氏は、主体思想に関心を抱いた日本人であったが、1977年に、2、3ヶ月の滞在のつもりで、北朝鮮に渡航した。渡航すると、彼女は、囚われ、よど号メンバーである柴田泰弘との結婚を強制され、子供を産んだ。北朝鮮に囚われていた間の1983年、彼女は、金日成の命令と朝鮮労働党56課の監視の下、若い日本人女性をそそのかして北朝鮮に連れてくるよう強いられた。この命令の結果、八尾氏は、日本人拉致被害者である石岡亨さんか松木薫さんのどちらかと結婚させ子供をもうけさせる目的で、日本人学生であった有本恵子さんをそそのかしてロンドンから北朝鮮に入国させた。これは、日本における革命勢力グループの人数を増やす計画の一部であった。

➤ 951

朝鮮労働56課は、駐ザグレブ北朝鮮総領事館から出されるヨーロッパでの作戦を遂行していた。ザグレブの副領事キム・ユチョルは、56課で働いており、よど号グループとその配偶者の活動を管理していた。副領事のキムとよど号グループのリーダーである田宮は、革命軍に加えるため日本人を「獲得」し北朝鮮に連行せよとの金日成の命令に基づき、海外における日本人拉致を協力して行った。

➤ 952：田中実さん～1978年ごろ

田中実さんは、1978年にヨーロッパに向けて出発した後に失踪した。2005年、日本政府は、田中さんを拉致被害者と認定し、北朝鮮からの解放を要求した。北朝鮮からは、この要求に対する反応はない。

➤ 953：石岡亨さん及び松木薫さんー1980年5月

石岡さんと松木さんは、友人であったが、北朝鮮の工作員にヨーロッパで拉致されたと認識されている。2人は、よど号メンバーの妻である森順子と若林（旧姓黒田）佐喜子によって、そそのかされて北朝鮮に連れて行かれた。北朝鮮は、彼等の拉致について認める一方、2人は、比較的若い頃に死亡したと主張している。しかし、北朝鮮は、その主張を裏付ける信頼性のある証拠を提示できていない。

➤ 954：有本恵子さん～1983年7月

有本さんは、1983年に、八尾恵氏によってそそのかされ、北朝鮮に連れて行かれた。有本さんは、ロンドンの語学学校での勉強を修了し、1983年7月に日本に帰ろうとしていたとき、八尾氏と出会った。八尾氏は、北朝鮮でマーケティングのアルバイトの仕事に就くように有本さんを説得した。（北朝鮮にいる）よど号リーダーの指示と、魚本（旧姓安部）公博（よど号メンバー）と北朝鮮の工作人員キム・ユーチョル（旧ユーゴスラビアの駐ザグレブ北朝鮮総領事館の副領事）の指揮の下、八尾氏は、コペンハーゲンで有本さんをマーケティング会社のボス（魚本）と国営貿易会社の責任者（キム）に合わせる段取りをした。4人がレストランで会った後、有本さんはキムと北朝鮮に渡り、消息が途切れた。それまでに拉致されていた日本人男性の妻となる若い日本人女性が「必要」とされていたことから、有本さんが北朝鮮の工作人員の標的となった。

➤ 955

1988年、日本にいる石岡さんの両親は、石岡さん、松木さん、そして有本さんが北朝鮮にいることを知らせる手紙を受け取った。その手紙は、ポーランドから送られたようであり、有本恵子さんの保険の書類に書かれていた。手紙では、彼等が元気であることと、なぜ北朝鮮にいるのかは書くことができないと述べる以外は、詳細が記載されていなかった。手紙には、石岡さんと有本さんの子供とされる赤ん坊の写真が同封されていた。有本さんの両親は、何年もの間、彼等の娘に会うために領事支援を求めたが、日本政府は、日本と北朝鮮に国交がないためできることは何もないとの助言で一貫していた。

➤ 956

2002年、北朝鮮は、これら3名の拉致について認めたが、有本さん、石岡さんそしてその幼い子供は皆、自宅でガス中毒により死亡したという、北朝鮮の実情に鑑みて信憑性の低い説明をした。彼等の死を証明する、それ以上詳細な説明や信用できる証拠は、提示されていない。8名の拉致被害者は亡くなったとする北朝鮮の主張にかかわらず、有本（恵子）さんの母・有本嘉代子さんは、拉致被害者の家族を代表して、今後も引き続き娘と全ての拉致被害者に関する回答を追及すると、東京で本委員会に対し、以下のとおり述べた。

「私たちは、拉致被害者を救うための活動を止めることはできません。」。

➤ 957：田中実さん～1978年6月

2005年、日本政府は、田中実さんをヨーロッパから北朝鮮に連れて行かれた拉致被害者として認定した。

➤ 958

田中実さんは、日本の兵庫県にある飲食店の元従業員であり、1978年6月、ヨーロッパに向けて日本を出発した後、姿を消した。日朝協議の際、北朝鮮は田中さんの入境を確認できないと主張している。

(iii) その他の事案

➤ 959

本委員会は、更に多くの日本人が拉致されたという信頼できる証言があると考えている。

- 朝鮮労働党中央委員会の35号室の元職員は、拉致された10名の日本人女性（日本政府が公式に認定しているよりも1名多い）を個人的に知っていた。
- 1名の日本人の拉致に直接関与した八尾氏は、数百名が拉致されていたかも知れないと示唆した。八尾氏は本委員会に以下のとおり述べた。

「正確には分かりません。しかし、北朝鮮が拉致したと思われる日本人は恐らく数百名。みんな「革命村のよど号メンバーとその妻たち」が拉致を行っていたが、彼等はこれを「仕事」や「活動」と呼んでいた。「Xはこの活動を完遂した」などという言い方をしていた。それで、私はみんながそれ（拉致）を実行していると知ったのです。」

- 朝鮮人民軍の偵察局の元職員で海上での日本人拉致に関与していた者は、本委員会に対し、海上での日本人の拉致及び強制失踪に関与したと述べた。1979年11月、この元北朝鮮職員は、日本の沿岸近くに偽装船で赴き、数名が乗船する他の船舶から離れたところにある船を探した。対象とした船には6名の乗組員がいた。作業員らは、最も若い者を捕えて北朝鮮に連れて行き、残りの5名は殺害した。
- 日本において拉致の可能性のある事案を調査している非政府調査団体である特定失踪者問題調査会は、470名の失踪者の事案を調査している。その調査から、同調査会は、約280名の日本人拉致被害者がいる「可能性がある(likely)」と考えており、そのうち77名は北朝鮮による拉致の可能性が「濃厚(highly likely)」としている。本委員会は、同調査会が現在「拉致濃厚」としている事案の多くは、そのすべてではないとしても、実際の拉致であると考え、北朝鮮とつながりが非常に高いとみられる事案において、いくつ

かのパターンが見られる。例えば、同種の職業（技術者、印刷工等）、特定の時期の失踪、身寄りのない成人、特定の地域の女性といった点である。

➤ 960

拉致された疑いのある何名かの者は、北朝鮮で目撃されている。例えば、ある北朝鮮住民は、失踪した印刷工3名のうちの1人である日高信夫さんに似た者を見たと言っている。日高さんは、1967年9月に東京から失踪した。3名の印刷工は、1966年から1968年の間に北朝鮮によって東京から拉致されたものと考えられている。3名は、それぞれ日本の異なる地方の出身で、いずれも東京で一人暮らしをしながら印刷会社で働いていた。彼等は、恐らく偽札を作る目的のため、その印刷機械に関する知識と技術の故に対象となったと考えられている。

➤ 961

日本人の拉致が疑われる顕著な事案の一つが藤田進さんである。大学生であった藤田さんは、1976年2月7日、アルバイトのため家を出た後、姿を消した。特定失踪者問題調査会が得た情報によると、藤田さんは、北朝鮮職員によってある病院に留め置かれていたが、北朝鮮まで連れてこられたとのことである。ある元北朝鮮住民によって提供された写真が、藤田さんの写真であるとされている。この写真の専門家による鑑定により、当該写真と彼が失踪する前の写真とが類似していることが判明した。日本の捜査官は、平壤の金正日政治軍事大学で藤田さんを見た元北朝鮮職員から証言を得ている。藤田さんの事案については、強制失踪作業部会により追跡調査されている。しかし、北朝鮮側は、藤田さんについて全く承知しないとしている。

➤ 962

朝鮮労働党の56課により北朝鮮に連れてこられた日本人拉致被害者（家族を含む）は、より広範なよど号グループが住んでいた日本革命村近くの敷地内に居住している。35号室により北朝鮮に拉致された日本人女性は、平壤に住んでいる。35号室により拉致された日本人女性の何名かは、北朝鮮職員の子を妊娠しており、彼女らは、複数の場所にある警備された住宅である「密封招待所」に送られて居住している。子供が生まれれば、当該職員の両親のところに預けられる。母親は週末にしか子供と会うことが認められていない。女性は、北朝鮮にいる間は、35号室の監視・見張りの下にある。彼女らが外出したり、子供に会いに行ったり、その他の活動に従事するためには、許可を取得しなければならない。

(g) 1970年代後半：他の各国からの拉致及び女性の強制的失踪

➤ 963

1977年以降、北朝鮮により、（日本及び韓国以外の）他の国の国民も同様に拉致された。拉致は、時に強制的に、時にそそのかしによって、実行された。拉致の理由としては、外国語をスパイや軍のための訓練学校で教えること、技術的な専門性の取得、そして、多くの拉致被害者の事案に共通することであるが、朝鮮人と非朝鮮人との婚姻を回避することを目的とした北朝鮮内の外国人への結婚相手として「与える」こと等がある。IV. Cで言及されたとおり、「純粋な朝鮮民族」は朝鮮社会の主要な特性の一つで、混血の朝鮮人の誕生を防止するため、多大な努力が費やされてきた。

●一例を挙げると、元米兵達には、不妊症であると信じられたため夫から離縁された（北朝鮮女性の）調理師達が提供された。ジェンキンス氏によれば、この調理師達は、「基本的には、非公式な妻として、妻としてのすべての伝統的な役割を果たすこととされた」。米兵等は、これら調理師等と性的関係を持つことが期待され、少なくとも一つの事例では、性的関係の欠如が男性の殴打に繋がっている。1978年、アブシャー氏の調理師は妊娠し、「一夜のうちに消えた」。

「アブシャー氏の調理師がたまたま妊娠してしまった後、我々の指導員は我々に対し、「組織」は、北朝鮮人の女性調理師を提供するという政策はうまくいっていないと決定し、我々の妻とするため4名のアラブ人女性をレバノンから見つけてきたと述べた。」

➤ 964

日本及び韓国以外の国々の国民について確認されたすべての拉致が、アブシャー氏の調理師が妊娠した後に発生しており、4名の元米兵が後に非朝鮮人の女性と結婚していることは、注目に値する。北朝鮮に拉致された非朝鮮人の女性のうち少なくとも何名かは、朝鮮民族の純血性を損なうことを回避する手段として北朝鮮内の非朝鮮人の結婚相手とすることを目的に連れてこられたものと推測される。

➤ 965：1978年：レバノン人女性4名の強制的失踪

1978年、レバノン人女性4名がそそのかしによって北朝鮮に連れてこられた。チャールズ・ジェンキンス氏によれば、彼女等は、4名の元米兵の妻となることとなっていた。彼女等は、月給千ドルの秘書業務に東京で就くことになると告げられていた。このうち2名が、ベオグラードを訪問中、拉致されてから

1年1か月後に逃亡を果たしたのである。他2名は、元米兵のジェームズ・ドレスノック氏及びジェリー・パリッシュ氏に妻として「与えられた」。北朝鮮に残された拉致被害者のうち1名の母親は、この女性の所在を知るに至り、被害者の解放を求めて交渉した。ジェンキンス氏によれば、(ベオグラードで逃亡した)拉致被害者のうち1名は、北朝鮮を離れる際、パリッシュ氏の子を身籠っていた。このことで、彼女とその家族は困難に直面することになり、彼女は、子供の父親と暮らすため、北朝鮮に戻ることにした。

➤ 966：1978年：マカオでのタイ人女性の拉致

アノーチャ・パンチョイさんは、1978年7月2日、マカオで拉致された。北朝鮮でパンチョイさんの近所に住んでいたジェンキンス氏によれば、パンチョイさんは、マカオで無理矢理船に乗せられ、自らの意思に反して北朝鮮に連れてこられた。彼女の失踪から3日後の新聞記事によれば、パンチョイさんは日本人を装った男性と一緒に出かけたとのことである。この記事では、パンチョイさんの友人の発言として、パンチョイさんが当該友人に対し、自分が夕方6時までに外出から戻らなければ警察に通報するよう話していたことが引用されている。この情報は、パンチョイさんが北朝鮮に到着後にジェンキンス氏が聞いた話と整合性がある。パンチョイさんはアブシャー元米兵に「与えられた」。

➤ 967

本委員会は、2013年9月、タイのバンコクで調査を実施し、パンチョイさんの家族から証言を得た。タイ政府は、パンチョイさんの失踪を拉致事件と認めたとはいわなく、彼女の失踪を「行方不明者」の事案として捉えている。にもかかわらず、タイ政府は、北朝鮮当局に対してパンチョイさんの情報提供を繰り返し要請しているが、何ら前向きな対応はないと述べている。2014年1月、タイの国家人権委員会は、パンチョイさん事件に関する報告書を取りまとめ、外務省が引き続きパンチョイさんの事案を追及するよう、タイ政府に勧告している。

➤ 968

本委員会は、パンチョイさんがマカオ滞在中に拉致され北朝鮮に連れて行かれたことを証明する十分な証拠が得られていると認識している。この結論の主要要素は、チャールズ・ジェンキンス氏の証言及びパンチョイさんも写っている同氏の家族写真等の証拠である。本委員会は、彼女が今日も北朝鮮にいるものと判断している。

➤ 969：1978年：マカオにおける中国人女性2名の拉致

コン・リイイン(別表記 Hong Leing-ieng)さんとスー・ミャオジェン(別表記 So Moi-chun)さんという中国人女性2名は、パンチョイさんと同時期にマカオで拉致され、北朝鮮に連れていかれた。2名は、マカオの宝石店で一緒に働いていた。家族の説明によると、彼女等は、日本人と思われる男性とその宝石店で知り合った。この北朝鮮職員と思われる男性は、気前がよく、彼女等を時々夕食や他の遊びに連れ出していた。

➤ 970

パンチョイさんがジェンキンス氏に語ったと伝えられるところによると、マカオからの船内には他の2名の女性のアジア人拉致被害者が彼女とともにいたが、彼女はこれら被害者らと話すことを許されなかった。北朝鮮到着の直前、これら女性3名は、服を脱ぐよう命じられた。服は、後日、きれいに洗濯されて返却された。到着時、3名は、一列に並んで上級指導員2名による審査を受けた。本委員会は、これら指導員2名の身元を把握している。伝えられるところによれば、幹部はそれぞれ1名の中国人女性を自分の車で連れていった。パンチョイさんは、その後、どちらの女性とも会うことはなかった。金賢姫元北朝鮮職員は、コンさんから中国語を学んだと明らかにしている。拉致された韓国人女優の崔銀姫さん(既述参照)も、北朝鮮でコンさんと連絡があったとのことである。

➤ 971: 1978年:シンガポールでのマレーシア人女性4名及びシンガポール人女性1名の拉致

「北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会」によれば、1978年8月20日、シンガポールにおいて、4名のマレーシア人女性、すなわちイェン・ヨケさん(23才)、セエト・タイ・ティムさん(19才)、ヤプ・メ・レンさん(22才)、マーガレット・オン・グアト・チョーさん(19才)と、シンガポール人女性のダイアナ・ン・クムさんが拉致された。日本人と称する男性2名が船上パーティーに5名の女性を派遣するようエスコート業者に依頼した。19～24才の5名の女性は消え、船も二度と現れなかった。崔銀姫さんは北朝鮮で近所に住んでいたマレーシア人について聞いたことがあるとされている。

➤ 972

本委員会は、これらシンガポール及びマレーシア国民の拉致疑惑に関する更なる情報を求め、両国政府に対して質問を行った。シンガポール政府は、本件に関する情報を有しておらず、また、近親者から領事面での支援を求められたこともない旨回答した。マレーシア政府からは、情報提供に関する我々の要請へ

の対応が得られていない。

➤ 973: 1979年: ルーマニア人女性の強制的失踪

ドナ・ブンベアさんは、1978年、イタリアで失踪しており、北朝鮮にそそのかされて連れていかれたものと見られている。ブンベアさんは、イタリアで美術を学んでいた時、画商と称するイタリア人男性と出会った。同男性は、香港で展覧会を開催するようブンベアさんを説得した。二人は平壤経由の香港行きで出発したが、男性は平壤で消えた。ブンベアさんは、北朝鮮に留め置かれ、ドレスノック元米兵に「与えられた」。ブンベアさんは、北朝鮮で、二人の息子を残して死亡した。1981年生まれのリカルド・ドレスノック氏と1983年生まれのガブリエル・ドレスノック氏は、2006年の「クロッシング・ザ・ライン」や2013年の「エイム・ハイ・イン・クリエーション」等のドキュメンタリーに登場している。ルーマニアのブンベアさんの家族はブンベアさんの子供に会いたいと願っているが、全く連絡が取れない状況が続いている。

➤ 974

ルーマニア政府は、本委員会に対し、チャールズ・ジェンキンス氏の2006年の著作で北朝鮮におけるブンベアさんの生活について明確な証拠が提供されて以降、北朝鮮当局に対してブンベアさんに関する情報提供を要請したとしている。ルーマニア当局からの要請に対し、北朝鮮は、「現状では、ルーマニア人が拉致されたことを確認する証拠やこれを示唆するものは存在しない」と回答した。

➤ 975: フランス人女性

本委員会は未確認のフランス人女性の拉致疑惑に関する情報を入手した。崔銀姫さんによれば、このフランス人女性は、フランスにおいて、アジアの富豪の跡継ぎと称する北朝鮮工作員と恋愛関係になり、そそのかされて北朝鮮に連れてこられた。この女性が平壤までその男性と旅行してきたのは明らかであるが、その後、この男性は、消息を絶った。彼女は、北朝鮮において、招待所に留め置かれた。金賢姫さんはこのフランス人女性を見たことがあるとされている。ジェンキンス氏は、映画撮影中に共演したフランス人女性を見たことを記憶している。しかしながら、彼は、その女性が拉致されてきたのかどうかは知らない。

1. 帰国したレバノン人拉致被害者による同時期の報告によれば、レバノン人女性が留め置かれたのと同じ北朝鮮の収容所に3名のフランス人女性がいた。
2. 本委員会は、北朝鮮により他の外国人、特に女性が拉致された可能性が高

いと認識している。前出のレバノン人女性は、帰還した時、レバノンの報道関係者に対して、収容所には3名のフランス人女性、3名のイタリア人女性、2名のオランダ人女性と他のヨーロッパ出身の女性及び中近東出身の女性を含む28名の女性がいたと述べたと伝えられている。

(h) 1990年代から現在まで：中国での拉致

➤ 976

1990年代から中国に多数の住民が流出し始めたことに対応して、北朝鮮の国家安全保衛部の職員は、組織的な拉致を中国国内で実行した。被害者達は、北朝鮮内で強制的に失踪させられた。これらの被害者の主だった者としては、中国や中国経由で韓国に逃亡する北朝鮮住民を支援した中国人や韓国人に加え、外国や韓国当局へ機微な情報を伝える可能性のある北朝鮮の元当局者等がいる。

●キム・ヨンファン氏は、軍事境界線地域で積極的に活動した韓国の人権活動家であるが、少なくとも6名の韓国国民と多数の中国国民（そのほとんどが朝鮮系）が過去15年間で誘拐された旨証言した。同氏は、また、拉致は北朝鮮住民のうち特定の背景を有する人々を標的にしていたと示唆した。

「少なくとも過去15年間にわたり、多くの誘拐及びテロ行為が行われている。北朝鮮は、誘拐のための組織を立ち上げ、運用している。彼等は、誘拐のために人を（中国の主要都市に）送り込み、誘拐犯達は瀋陽のような都市まで行っている。しかし、彼等は、無差別に韓国人や北朝鮮人を誘拐しているわけではなく、以前に保衛部や警察に所属していたり国家と特別な関係を有していたりするような重要な人物を拉致している。彼等は、重要な地位に過去に就いていたり現在就いていたりする脱北者を標的とする。誘拐の標的とされた人物が特別な地位に就いていなかったとしても、中国において反国家的政治活動に従事していたことが分かれば、拉致の標的となり得る。」

➤ 977

本委員会は、北朝鮮の国家安全保衛部のために中国において拉致を行った職員を有罪とする裁判所の判決を、一つは韓国で、もう一つは中国で入手した。拉致を実行した組織及び拉致の方法に関して判決で明らかにされた事実は、相互補完的であり、また、本委員会が公聴会、秘密面談及び提出された文書によっても裏付けられている。

➤ 978

第一の判決は、2005年に韓国のソウル中央地方裁判所によって下された。この裁判で明らかとなった事実は、容疑者である朝鮮系中国人の国家安全保衛部職員の自白及び拉致事件に直接関わったことのある元北朝鮮職員の証言を基礎としたものであった。当該事実は、韓国の牧師であるキム・ドンシク師、元日本人のリャン・チョオクさんとその家族、そしてその他12名の北朝鮮住民の北朝鮮による拉致について極めて詳細に明らかにするものであった。

➤ 979

第二の判決は、2006年に中国の吉林省延辺朝鮮族自治州の中級人民裁判所によって下された。この裁判では、2名の北朝鮮人と4名の中国人が6件の拉致事件と1件の不法拘留の罪で有罪宣告を受けた。同判決は、被告人達が北朝鮮の国家安全保衛部の高官により北朝鮮から下された命令に従って拉致を実行したと裁断している。判決で言及されている被害者の中には、元日本人のリャン・チョオクさんと韓国のキム・ドンシク師が含まれている。国家安全保衛部の職員を含む2名の北朝鮮人は、3年7か月及び3年6か月の懲役刑を宣告された。中国人の被告人達は、6か月から2年間の禁固刑を宣告された。

➤ 980

これら判決及び本委員会が聴取した追加的な証言及びその他の入手した情報は、北朝鮮の国家安全保衛部の職員及び中国人により構成されるチームが、北朝鮮のために、周到に組織化された多数の拉致を実行したことを示している。彼等は、北朝鮮の咸鏡北道の会寧に所在する国家安全保衛部の職員に雇われ、その命令と緊密な作戦指揮の下で行動した。ゴクサン工場として知られる会寧の国家安全保衛部の「隠れ家」が、作戦基地として使用された。中国及び韓国での判決は、作戦を首謀した咸鏡北道に勤務する国家安全保衛部の司令官達の名を特定している。本委員会は、かつて中国にいた安全保衛部の元職員及び北朝鮮から脱出する北朝鮮住民の支援活動を行っている他の証人から、同一の関係者達を示唆する情報を独自に得ている。

- 2000年1月、国家安全保衛部のあるチームが、キム・ドンシク師を中国吉林省東部の延吉市で拉致した。キム師は、北朝鮮住民が中国から韓国へ脱出するのを支援していたため、北朝鮮の標的となった。国家安全保衛部の職員は同師を罠に誘い込み、北朝鮮に強制的に連れていった。国家安全保衛部の職員が北朝鮮内で同師を引き受けた。同師は、北朝鮮において、咸鏡北道会寧の地下尋問拘禁施設に拘禁された。同じ地下監獄にキム・ドンシク師と同時期に拘禁されていたチョン・グァンイル氏は、そこでキム・ドンシク師と会い話をしたと本委員会に証言した。同師は松葉杖をついていて拷問を受けていることを示す怪我をしているように見えた。韓国統一研究所によれば、キム・ドンシク師は、2001年2月、拷問による怪我の結果、拘禁されたまま死亡した。
- 1999年2月、国家安全保衛部の職員は、リャン・チョオクさんと3名の家族を拉致した。主な被害者は、1960年代に日本から移住し後に北朝鮮公民となった61才の日本人女性であった。現場の職員に対して発出された命令によれば、「仮にリャン・チョオクさんとその家族が日本に辿り着

くことになれば北朝鮮にとって恥辱」となることから、会寧の国家安全保衛部は、あらゆる必要な手段を尽くして当該女性と家族を拉致すべしとの「最高命令(supreme orders)」を受領したとのことである。

➤ 981

1998年から2000年にかけて、下記の人々が、北朝鮮の国家安全保衛部により命令され同部のために実施された周到に計画された作戦により、中国から拉致された。

- 1998年3月、北朝鮮住民のチョン・ソン氏（中国名：Qian Cheng）は、中国吉林省延吉市で拉致された。国家安全保衛部が彼を韓国の情報当局と協力していたと考えたため標的とされたと見られる。
- 1998年8月、元北朝鮮記者で北朝鮮を脱出し韓国国籍を取得していたチェ・チョンソク氏（中国名：Zhu Yuan）は、中国吉林省延吉市で国家安全保衛部に拉致された。
- 1999年1月、リュ・ヨンボム氏は、中国吉林省竜井市で北朝鮮に拉致された。同氏と一緒に働いていたパク・ボンウクさんは、中国吉林省安図県で1か月後に拉致された。
- 1999年2月、ソク・トゥウクさんは、中国吉林省竜井市で北朝鮮に拉致された。
- 1999年2月、ペク・ソクク氏は、韓国の情報当局のために活動しているとの疑いを北朝鮮から受け、吉林省龍井市で拉致された。
- 1999年2月、国家安全保衛部の作員が、中国吉林省龍井市三河鎮に脱出していた朝鮮人民軍兵士を拉致した。
- 1999年2月、国家安全保衛部の作員が、2名の朝鮮人民軍治安部隊隊員と結託して中国吉林省竜井市で2名の兵士を拉致しようとして、失敗した。これら2名の兵士は北朝鮮から脱出する人々への支援に関わっていた。
- 1999年3月、吉林省竜井市において、国家安全保衛部の作員が、ホァン・ヨンチャン氏を拉致した。同氏は中国へ脱出前は平壤の高官であった。
- 1999年3月、リム・インスクさん、夫のハン・インチャン氏、二人の娘2名、息子1名及び8才の孫は、中国吉林省安図県で北朝鮮に拉致された。
- 1999年6月、キム・チャンロク氏は、国家安全保衛部により穀物盗難の疑いがかけられていたが、同部作員により中国吉林省竜井市三河鎮で拉致された。
- 2000年10月、北朝鮮作員が、中国吉林省延吉市から、中国国民(複数)Jin Zhonglu を拉致した(ママ)。被害者(単数)はかつて機密情報を持って北朝鮮から中国に脱出し、中国国籍を取得していた。
- 2001年4月、北朝鮮作員が、中国吉林省において、Jin Huzhe 氏を拉致

した。彼等は、本来の標的である他の北朝鮮人の情報を得ようとして、同氏に対し、図們江でおぼれさせると脅迫した。既にその標的が中国から韓国へ移動していたことを知ると、作業員は同氏を解放した。

➤ 982

本委員会としては、北朝鮮による中国での拉致は、1998年から2001年の間に実行されたこれらの拉致事案にとどまらず、より長い期間行われてきていたと信じるに足る根拠を有している。

- 最高指導者とその家族の護衛任務に就いていた北朝鮮護衛司令部の元メンバーは、1989年に中国に脱出したと証言した。彼が北京に到着した後、韓国の外交官を装った北朝鮮の作業員が北朝鮮大使館に彼を誘い込み、彼を強制的に平壤に連れ戻した。その後、彼は、最終的に解放されるまで、耀徳の第15政治犯収容所に何年間も拘束された。
- 1995年7月、アン・ソンウン師が拉致された。彼は後に北朝鮮のテレビ放送に映ったが、その後の彼についての情報は得られていない。
- クリスチャン・ソリダリティ・ワールドワイドによれば、北朝鮮住民のキル・チマン、キム・チョルフン、キム・チョルス、シム・ソンシンが中国で2003年4月に拉致された疑いがある。2002年に北朝鮮から韓国に脱出したジン・キョンスクさんは、2004年4月、中国を訪問中に拉致された。元北朝鮮軍士官のカン・ジョン氏とリム・ヨンハク氏は、北朝鮮住民の同国脱出を支援していたが、2005年に中国吉林省延吉市で拉致された疑いももたれている。
- 北朝鮮自由連合は、70のNGOが集結した組織であるが、中国の病院で北朝鮮作業員によって73才の女性のリ・ジュイムさんが拉致されたと報告した。北朝鮮は朝鮮戦争時に若かったりさんを拉致していた経緯があることから、作業員は（この時も）りさんを標的にしたと見られる。2008年4月、42才の朝鮮系中国人のリ・ギチョン氏は川辺で北朝鮮作業員に捕えられた。リ氏は、脱北者の支援に関わっており、新たに脱出した北朝鮮住民を国境から中国延吉市まで先導していた時に拉致された。
- 本委員会に対して、1名の証人が、中国吉林省延吉市における2010年のチュ氏（氏名は非公表）拉致事件について証言した。朝鮮系中国人のチュ氏も、北朝鮮からの脱出の支援に関わっていた。本委員会に提出された他の秘匿証言は、200人に上る中国人（ほとんどが朝鮮系）が拉致された可能性があると示唆している。
- 他の数名の証人は、すべて中国側で北朝鮮脱出を支援して定期的に同地域を訪問しているが、国家安全保衛部の作業員が継続して滞在しており拉致の危険があると証言している。ある証人は、国家安全保衛部の作業員と名乗る者

- から2度の身体的攻撃を受けた。彼は、2度とも、危ない所で逃れることができた。他の証人達は、如何にして計画的な拉致から逃れたかを詳しく延べた。彼等は、中国治安当局の友好的な知人から特別な警告を受け取っていた。最近北朝鮮を脱出してきたある元北朝鮮政府関係者は、国境地域のいくつかの教会に助けを求めたが、教会の指導者らがこの証人を助けることにより、かえって自らが拉致被害者となることを恐れたために断られたと報告した。
- ある元政府関係者は、このことと関連して、タイに所在する北朝鮮政府関係者もタイに辿り着いた高いレベルの脱北者を発見し拉致するよう指示されていたと述べた。

(了)